学校教育における礼儀：研究動向と今後の研究課題

柴崎直人
岐阜大学大学院教育学研究科

A Study of Politeness in School Education : Research Trends and Future Issues

Naoto SHIBAZAKI
Gifu University, Graduate School of Education

はじめに

礼儀は社会生活を営む上で重要な要素として、人間関係の潤滑油などという表現が用いられることが多い。それは職業上の人間関係においても同様であり、ビジネスマナーの習得が企業において重視されているのは、企業等における新人研修や初任者研修といわれる内容のひとつとして業種や職種を問わずたいてい組み込まれていることからも明らかである。しかしながらそれはまた同時に、入職者においてビジネスに必要な礼儀の習得が不十分であり、それ以前の教育の場において礼儀の教育が十分になされていないという企業側の認識を示すものでもある。また、一般人に小学校で教えてほしい内容を尋ねる調査などでは、たいてい上位に礼儀・マナーが挙げられているが、これらの結果は学校では礼儀を教えていない、もしくは礼儀を十分に学べていない、との認識が企業のみならず広く一般にも存在することを意味している。このような状況下において、学校教育における礼儀の指導はどのような状況にあり、それに関する調査や指導の開発はどのような状況にあるのだろうか。このような視点から、本研究においては学校教育における礼儀の研究に関連する先行研究をレビューし、今後の学校教育における礼儀の研究がどのような課題を有しているのかを検討する。

１．検討する先行研究の範囲

本研究で題材とするのは、日本における義務教育学校に相当する教育機関で展開される礼儀であることから、先行研究として捉えるのは、礼儀に関する研究のうち教育分野を扱っているもの、義務教育学校に相当する教育機関における礼儀を扱っているものが妥当と思われる。しかし礼儀に関する日本の研究状況を俯瞰することも重要と考えられるため、ここではまず礼儀をテーマとする日本の学術論文の網羅的な把握を試みる。

２．博士論文における先行研究

礼儀に関する博士学位論文は、社会学、文学、教育学の分野に集まり、その数は極めて少ない。また、「礼儀」の語をタイトルに含む論文は見られない。わずかに研究の中心テーマに礼儀を据えた 4 領域の 5 論文が、以下のように確認できるのみである。

①社会学の立場から、フランス市民層の礼儀に焦点を当て、ふるまいの変化をありのまま描こうとする社会学者ノルベルト・エリアスの社会学的研究の成果を、エリアスが問い続けた問いを軸に再構成した奥

村[1]の論文。

②史学の立場から、朝鮮と日本における朱子学の受容について、とくに朱子による冠婚葬祭手引きである朱子家礼を手掛かりとして比較した李[2]の論文。

③教育史学の立場から、18 世紀イギリスのジェントルマン教育に注目し、「マナー」と「文明化」を手掛かりとして学校教育の誕生と展開について論じた安川[3]の論文。

④書誌学の立場から、近世の小笠原流礼法書においてその伝書の奥書から伝系について論じた陶智子[4]の論文、そして水戸藩士に伝わる水島派の小笠原流の礼法書について論じた川瀬康子[5]の論文

以上の４領域にわたる５編の論文のうち、小笠原流礼法に関する研究が２編見られるが、いずれも近世の、しかも書誌学的なアプローチによってなされた礼法書の分析であり、書誌学における小笠原流に関する書籍の位置づけについては詳細な検討がなされているが、日本の学校教育における位置づけに関する検討は見られなく、教育学的なものではなかった。また、作法の内容にまで踏み込んだ分析がなされてはいない。教育学分野に属するものは教育史学に関する安川の英国における「マナー」に関する私教育に関する論文のみであるが、異文化圏の「マナー」についての検討はなされているが、日本の学校教育における礼儀の詳しい検討はなされていない。なお、「作法」「マナー」「エチケット」に関しても確認したところ、それらをタイトルや中心テーマに置く博士論文の存在は認められなかった。

では一般の学術論文においてはどのようなものがあるだろうか。学術領域ごとに区分して確認していく。

３．一般論文における先行研究１（教育学関連ではないもの）

（１）社会学的アプローチの論文

奥村の博士論文と同様に、社会学の視点から竹内[6]は、「西洋化」・「近代化」を象徴する人間像として機能した「紳士」の概念を手がかりとして近代日本の礼儀作法書を分析することで、西洋文化の受容にあたって働いていた力学について指摘している 。山崎[7]は、近代日本の礼儀作法関連書籍の刊行動向を分析し、そこから近代日本の「たしなみ」への関心の変容について検討して、礼儀作法書の刊行を巡る状況の変化について明らかにしている。いずれもある特定のテーマや時期を対象とした礼儀作法書の分析を行った研究である。

（２）ヨーロッパにおける文化史学的アプローチの論文

他国における礼儀の展開と社会や文化の変容に関する論文については、たとえば小野[8]は 16 世紀のイタリア宮廷における食事作法に注目し、その変容について検討している。また小林[9]は 16 世紀から 18 世紀のフランスにおける「ふるまい方」を手掛かりに宮廷社会を分析している。フランスの交際社会における処世術の文化については、増田[10]の博士論文や、上原[11]をはじめとして、フランス文化やフランス史の研究者、心理学者による論文が散見される。その中には内村のように規範としての服装を取り上げ[12]、フランスの服飾文化史の視点から、部屋着[13]帽子[14]などを手掛かりとして、同時代の人びとの感性と振舞いの特性を検討する研究者も存在する。このように、16 世紀から 19 世紀のヨーロッパにおける礼儀に関する文化史学的研究は、一つの分野としてある程度のまとまりを持っていると考えられる。しかし当然ながらそれらはヨーロッパにおけるふるまい方や感性について明らかにしたものであり、日本の礼儀や作法を基点として学校教育において振舞いや感性にアプローチした研究はみられない。

（３）東洋における比較文化学的アプローチの論文

兼本[15]による韓国と日本の礼儀の比較や、崔[16]による日中の若者における礼儀作法の比較など、異文化の礼儀に関する研究は、上記のヨーロッパ圏のほかには、中国、韓国の礼儀と日本のそれとの比較を中心としてすすめられている。しかしそこで取り上げられる作法は、あくまでも各国における一般的な場における一般的な「マナー」の範疇に留まるものであり、学校教育という場に注目して取り上げて比較したものは

みられない。

（4）生活文化学的アプローチの論文

勝田[17]による、食文化における人と箸との関わりとその変遷に関する論文や、松本[18]による贈答儀礼における包装の礼儀と心の文化の論文のように、生活文化の領域からの礼儀の研究もみられるが、学校教育の視点から詳しく検討したものはみられない。

（5）書誌学的アプローチの論文

書誌学の分野では綿抜豊昭をはじめとして小笠原流の伝書類についての研究が少なからず見られるが、学校教育と関連を持つ研究と考えられるものは次の2点であった。

吉村[19]は明治期の作法書における作法書史への位置づけをこころみ、吉川・歌川[20]は戦前の礼儀作法書を手掛かりとした音楽の文化的傾向について把握をこころみている。

また、呑海・綿抜は[21]は、図書館マナーの社会的受容について考察を行うことを目的として近代礼法書における図書館に関する記述内容の分析を行っている。それらはいずれも礼儀作法書の書誌学的な検討に留まるものであり、学校教育の視点から書籍を分析したものではない。

（6）文学的アプローチの論文

玉井[22]は明治の女性初の近代小説家とされる三宅花圃の作品をとりあげ、そこに登場する礼儀作法を分析して当時の良妻賢母教育の成果を指摘している。

（7）認知科学的アプローチの論文

文沢・吉田[23]は、心理学的手法を用いて日本人の礼儀の概念を抽出する研究を行った。1960年代に研究が計画された質問紙調査であるが、礼儀に関する心理的調査の原点として、その質問紙の構成内容は数十年後の現在でも少しずつ形を変えて利用されている。野村[24]は礼儀の非言語的表出に注目し、記号論的な分析を行っている。佐々木[25]は礼儀作法の形成過程を検討するとともに、それが現代青年のマナー観とどのような関係にあるのかを質問紙調査をもとに認知科学的手法を用いて検討している。

小森[26]は、礼儀正しさを社会的文脈に応じた適切な振る舞いと定義し、社会的文脈が礼儀正しさの非言語的表出方略に及ぼす影響を検討した。しぐさやふるまいと礼儀に関して石田[27]は、身体技法に焦点を当てて、その近代化と近代化から生じる問題点の解決策を探っている。野村・中村[28]は、小型人型ロボットからの発話を手掛かりとした礼儀正しさに関する実験を行い、発話様式と姿勢の丁重さの組み合わせに矛盾がある条件において，ロボットの発話内容に対する記憶想起課題およびロボットに対する印象評価が低下することを示した。また兪[29]は中国人の立場から礼儀を中心とした日本人の言語的コミュニケーション様式を分析している。

以上が、日本における、礼儀に関する教育学関連ではない一般論文における先行研究である。社会学的アプローチのもの、東洋における比較文化学的アプローチのもの、生活文化学的アプローチのもの、文学的アプローチのものがみられるが、中でもヨーロッパにおける文化史学的アプローチ、そして認知科学的アプローチの研究が、特にさかんに行われている状況が伺える。これらのなかでも本研究と関係が深いものとして、書誌学的アプローチのものを指摘できる。ここで揚げられている綿抜には、論文のほかにも小笠原流礼法に言及する業績がみられるが、それらは総じて明治期の小笠原流の事績を、当時刊行された礼法書や後継者の著作を解説するその一部として概略的に述べたものであり、学校教育との関連性について踏み込んで論考したものではなかった。

続いて教育学と関係している学術論文にはどのようなものが見られるのか。確認する。

４．一般論文における先行研究２（教育学関連のもの）

矢野・越智・松田が礼儀について「教育学にとっての重要なテーマであり、教育史、臨床教育学、教育社会学、教育人間学など、教育学が全体として取り組むべき研究課題の一つである」[30]と指摘するように、礼儀は教育学の諸領域に関連性を持つ大きなテーマであり、以下のようなさまざまな領域において取り上げられている。

（１）教育史における礼儀の論文

学校教育における礼儀をテーマとした研究について、教育史の視点から　斎藤[31]は国の政策「純潔教育」の成果として刊行された冊子「男女の交際と礼儀」の版による相違を分析し、従来の「純潔教育」研究の誤謬を指摘している。

小林[32][33]は植民地教育における礼儀をテーマに、植民地朝鮮の女学校・高等女学校における礼儀作法カリキュラムや、植民地台湾の高等女学校における礼儀作法空間としての作法室について論じており、台湾では「作法」の獲得が日本人のアイデンティティの獲得を象徴するものとされているが、このような関係性が朝鮮人には見いだせないことを指摘している。なお小林は著書『「花」の成立と展開』（和泉書院, 2007）において高等女学校の教育に「花」が導入されていく過程を丹念に検討しているが、そのなかには「花」を細目に持つ「礼節」「礼法」などの礼儀に関する記述も含まれており、女学校における礼儀の展開を「花」の視点から検討している点が興味深い。

（２）外国の教育を対象とした礼儀の論文

外国の学校教育カリキュラムをテーマとした研究もおこなわれている。渋谷[34][35]はタイの人民党政権下における初等教育カリキュラムにおいて、政府が期待する国民像と国民的礼儀作法を分析し、国民形成の過程において身体的な振る舞いが発展の度合いを示す重要な道具であることを指摘した。韓[36]は、韓国の伝統文化教育、とくに幼児保育カリキュラム事例の分析から、伝統的な礼儀教育が行われている点や年中行事に関連する伝承遊び、伝統料理活動が多く取り入られている点が特徴であることを指摘している。

（３）体育教育学における礼儀の論文

礼儀に関する研究が多く見られるのは体育教育学の分野である。

近藤・山上は[37]スポーツマンシップの構成要素の国際比較を行い、日本では公正・ベストをつくす・真剣・礼儀が上位にあることと、それが他国の諸外国と相違することを示し、その原因は武道や芸道精神に基く日本独自のスポーツ観にあることを指摘した。

武道と礼儀の関係性ついての研究としては、上野・井上・氏家・矢野・小山・小川・今藤　・中野・富木[38]による「礼に始まり礼に終わる」という思想の検討や、伝統武術の思想をもとに礼の概念を検討した村山[39]の研究がある。また藪崎[40]は現代武道における礼儀の役割として自己形成があることを指摘した。ビットマン[41]は日本の武道における礼の特異性を検討し、「自分のことだけを考えるのではなく、一緒に競ってくれた相手の存在に感謝し、勝者としての喜びを抑制しながら、相手の心情を思いやるところに『礼』の意味がある。」と指摘している。

このような武道における礼の各論として、馬場による剣道における礼儀の研究[42]、尾形・風間[43]、佐藤[44]による柔道における礼儀の研究、岸本[45]による空手における礼儀の研究がそれぞれみられる。

なかでも興味深いものは、亀井[46]の学校教育における武道場建築に関する研究である。亀井は学校教育に関する武道場の設計の前提として、武道場に対する利用者の敬意と礼儀作法が関与しなければならないと指摘したうえで、上座・下座を明確にした武道場の設計とその諸条件について提唱している。武道学と建築学と学校教育学の３領域にかかわる研究である。

（4）高等教育における職業人教育に関する礼儀の論文

学校教育における礼儀は、職業人教育の分野において「ビジネスマナー教育」として展開されている姿を多く見かける。よってそれに関する研究も目にすることができる。

儀賀[47]は日本と諸外国とのマナーを比較して、そこから派生するギャップがビジネスに影響を与えることを指摘した。日本のビジネスマナーについて金田・大西[48]はその内容と、ビジネスパーソンにおける礼儀に対する意識について調査を行い、ビジネスマナーの学びへの対応が急務であることを指摘している。

ビジネスマナーの各論としては平田[49]による現代人のマナーの捉え方を秘書検定試験の内容から検討したものや、島田[50]による小笠原流礼法の伝書における礼儀の本質と、秘書実務教育との関連性の研究などが見られる。また森・笠木・高山・田川・伊瀬・関[51]のように、病院職員の身だしなみと礼儀に関する論考もみられる。

このように、職業人教育における礼儀の研究は、おもに高等教育における実践に伴うものといえる。たとえば高綱は大学教育におけるキャリア教育の観点から礼儀について言及し[52]、森川は実践的なビジネスマナー教育の内容について論じ[53]、平田は大学教育における資格取得に関する視点から秘書検定とそれに関係する礼儀を取り上げる[54]など、高等教育でのキャリア教育やビジネスマナー教育、秘書検定や教師教育といった資格取得に関する礼儀の教材に関する研究が多数みられる。

（5）中等教育・初等教育における礼儀の論文

ところが、高等教育とは比較にならないほど初等教育・中等教育の内容に関する研究は少ない。江口・住田ａ[55]、江口・住田ｂ[56]による、明治期の小学校に礼法が導入された経緯とその教科書の内容の推移に関する研究、手治・西木による高等学校商業教育におけるビジネスマナーの指導内容に関する研究[57]、江本・横山・宮寺(1998)による情報教育の教材としてのマナー[58]などのＩＣＴリテラシーに関する研究など、情報科とネットマナーや携帯マナーに関する研究が少数みられる程度である。このうち、江口敦子と住田昌二による礼儀作法教科書の研究は、陶智子及び綿抜豊昭によって「近代礼法史の時期区分としても適切なものとなっている」と、近代礼儀作法研究の基礎資料としての言及がなされ[59]、また後述の山﨑や井上・鈴木によってその発展的な研究が進められるなどしている。しかしこの江口・住田の研究は、近代の礼法教科書を網羅的に検討して時期区分を詳細に示したものではあるのだが、現代の学校教育における教科書の分析を含めて俯瞰したものではない。

この江口・住田の業績を基底に置いた研究としては、上に挙げたように山﨑貴子（濱貴子）による近代日本における女性のたしなみへの関心についての作法書の研究[60]と、井上・鈴木による明治20年代初頭の広島県の小学校で展開された修身科における作法の指導に関する研究[61]がみられる。前者は江口・住田の研究を踏まえて分析対象のデータ範囲を拡大して、社会全般における礼儀作法書刊行の動向について論考したものであり、後者は江口・住田による小学校礼法教科書で扱われた作法の内容の分類に倣いながら、明治20年代初頭に広島県の小学校で行われていた修身科における作法指導の方法について検討したものである。しかしこれらの研究はいずれも現代の学校における礼儀作法教育の在り様については触れていない。

また、修身科における礼儀については、たとえば片山による明治前期の小学校修身書からみた女子道徳の変遷の研究[62]や、田部井による家庭科教育と修身科における作法との関連についての研究[63]がみられる。しかし前者は修身科や修身書の内容項目の一部として「作法教授」「礼敬」「礼式」「作法」といった文言やその掲載箇所が示される程度の扱いであり、後者は家庭科教育に視座を置いて修身科で扱われる「作法」について論じるといった扱い方に留まっており、学校教育全般について取り上げたものではない。

私立の中学校と高等学校に関する礼儀の研究としては、野村[64][65]が現代日本の私立中学校・高等学校における「礼法」を冠する教育について調査し、平成初期の私立学校の中等教育における礼儀の教育の実施状況を詳細に報告している。しかしこれは礼法教育の実施状況に焦点をあてたものであり、実施内容は取り上げられていない。また、初等教育の教育内容としての礼儀に関する研究については、篠原の食育の実態調

査[66]のほかは認められなかった。この篠原の研究は食育分野における児童生徒の実態調査であり、その調査結果として食育の効果の一つに「マナー」が挙げられているに過ぎないため、礼儀を中心的テーマとした論文とは認めることは難しい。

現代の道徳教育で用いられる学校教科書や副読本に関する研究は柴崎により進められている[67][68][69]が、教科化した道徳における教科書の検討はなされていない。

（６）幼児期におけるしつけと礼儀の論文

しつけは礼儀と関係が深い。松田[70]は、「しつけ」とは、元来は着物を仕立てる際の仕付けや田の植付けの意から、子どもに礼儀作法を教え込むことをいうようになり、「躾」と表記されるようになった、と定義する。

幼児期におけるしつけの研究については毎年数多く行われている。増田[71]によれば、①民俗学、②心理学、③社会学、④教育学の４つの区分に分類され、その研究は学問横断的な手法を必要とするとされる。しつけの研究の中での礼儀は、吉川[72]が「一般的な礼儀作法を越えて，しつけは自立，発達課題，人格形成といった生涯発達上の人間形成に関わる重要な営みとして位置づけられるであろう。」と指摘するように、しつけの基盤となる要素のひとつとして扱われる。

ところが実際の研究では、礼儀との関連におけるものがみられない。しつけの分野においての礼儀は、研究の対象というよりも実用にあたっての指導内容の例示という印象が強く、たとえば下村[73]のように、食事マナーの具体例と多様な作法の紹介、といったものが見られるのみであった。

５．まとめと今後の課題

以上からこれまでの日本の学校における礼儀の教育について、次のような状況が確認できた。

一般論文における先行研究については、社会学的アプローチのもの、東洋における比較文化学的アプローチのもの、生活文化学的アプローチのもの、文学的アプローチのものがみられるが、中でもヨーロッパにおける文化史学的アプローチ、そして認知科学的アプローチの研究が、特にさかんに行われている状況が伺える。しかしそれらにおいては日本の学校教育における礼儀の詳しい検討はなされていない。また、特定のテーマや時期を対象とした礼儀作法書の分析を行った研究はなされているが、現代の学校教育に用いられる教科書の研究はなされていない。そしてヨーロッパにおけるふるまい方や感性について明らかにしたものは見られるが、日本の礼儀や作法を基点として学校教育において指導の対象となる振舞いや感性にアプローチした研究はみられない。

これらのなかでも学校教育と関係が深いものとして、書誌学的アプローチのものが指摘できる。ここで揚げられている綿抜の著作には、論文のほかにも小笠原流礼法に言及する業績がみられるが、それらは総じて明治期の小笠原流の事績を、当時刊行された礼法書や後継者の著作を解説するその一部として概略的に述べたものであり、学校教育との関連性について踏み込んで論考したものではなかった。

外国の教育を対象とした論文では伝統的な礼儀教育が行われている点や年中行事に関連する伝承遊び、伝統料理活動が多く取り入られている点が特徴であることを指摘しているが、その詳細な内容についての言及はなされていない。

礼儀に関する研究が多く見られる体育教育学の分野においてはスポーツマンシップの構成要素の国際比較や日本の武道における礼の特異性、学校教育における武道場建築に関する研究が見られた。

職業人教育に関する礼儀の論文においては小笠原流礼法の伝書における礼儀の本質と、秘書実務教育との関連性の研究、病院職員の身だしなみと礼儀に関する論考など、礼儀の教育の原理や具体的な内容に触れるものも見られた点に注目したい。しかし職業人教育における礼儀の研究は、おもに高等教育における実践に伴うものであり、初等教育・中等教育に関するものではなかった。

この高等教育とは比較にならないほど初等教育・中等教育の内容に関する研究は少ない。近代の礼法教

科書を網羅的に検討して時期区分を詳細に示したものはあるが、現代の学校教育における教科書の分析を含めて俯瞰したものではなく、いずれも現代の学校における礼儀作法教育の在り様については触れていない。また、その内容についても家庭科教育に視座を置いて修身科で扱われる「作法」について論じるといった扱い方に留まっており、現代の学校教育全般における礼儀の指導の内容について取り上げたものではない。

これらの結果から考えられる今後の課題としては、特に初等教育及び中等教育における礼儀の研究の発展が挙げられるだろう。そこにおいては学校教育の「礼儀」の指導において具体的に扱う内容の検討が望まれると考えられる。特に「礼儀」を扱う教科としての道徳科における教科書についての研究と、その内容に関する研究については、今後の展開が期待されるものと考えられる。

引用文献

(1)奥村隆「文明化と暴力の社会理論 ： ノルベルト・エリアスの問いをめぐって」, 東京大学博士論文, 博士（社会学), 2003-03-12

(2)李承妍「朝鮮における「朱子家礼」の受容および展開過程」, 大阪市立大学博士論文, 博士（文学), 1995-03-24

(3)安川哲夫「ジェントルマンと近代教育:十八世紀イギリスにおける教育的学校観の誕生」, 九州大学博士論文, 博士（教育学), 1993-10-01

(4)陶智子「近世小笠原流礼法書の研究」, 図書館情報大学博士論文, 博士（情報学）, 2003-3-25

(5)川瀬康子「水戸藩関係小笠原流礼法書の研究」, 筑波大学（図書館情報大学）, 博士（情報学), 2005-3-25

(6)竹内里欧「『紳士』という理想像の誕生と展開 ： 近代日本の礼儀作法書にみる」, 京都社会学年報 ： KJS 11, 2003, pp. 13-28

(7)山崎貴子「近代日本における「たしなみ」への関心の高まりとその変容 ： 礼儀作法書刊行動向の分析から」,『教育・社会・文化研究紀要』12, 京都大学, 2009, pp. 21-40

(8)小野真紀子「16 世紀イタリアの宮廷における礼儀作法の発展: 食事作法による考察」, イタリア学会誌 (60), 2010, pp. 155-176

(9)小林亜子「「眠れる森の美女」から「王妃の村里」へ--アンシアン・レジーム期フランスの〈宮廷-社会〉と〈礼儀作法=振る舞いかた〉(1)」, 埼玉大学紀要, 教養学部 43(2), 2007, pp. 19-34

(10)増田都希「十八世紀フランスにおける「交際社会」の確立 ：十八世紀フランスの処世術論」, 一橋大学博士論文, 博士(学術), 2008-03-21

(11)上原秀一「19 世紀フランスにおける礼儀作法書の役割について--ラ・サール『礼儀作法』の改訂箇所の一考察」, フランス教育学会紀要 (7), 1995, pp. 17-28

(12)内村里奈「17 世紀フランスにおける服飾規範」, 実践女子短期大学紀要 31, 2010, pp. 77-90

(13)内村理奈「18 世紀初期フランスの礼儀作法と部屋着モード」, 服飾文化学会誌 8(1), 2007, pp. 11-21

(14)内村理奈「アンシャン・レジーム期の帽子 ： 礼儀作法が構築する階層社会」, 国際服飾学会誌 = Journal of the International Association of Costume (29), 2006, pp. 53-69

(15)兼本円「日韓の礼儀と異文化コミュニケーション」, 言語文化研究紀要 : Scripsimus(4), 1995, pp. 77-91

(16)崔玉華「日本人の礼儀作法と若者たちの認識・行動 : 中日比較文化論からの一考察」, 横浜商大論集 40(1/2), 2007, pp. 96-135

(17)勝田春子「食文化における箸についての一考察 ： わが国における箸の変遷（第 2 報）（室町時代〜江戸時代)」, 文化学園大学研究紀要 21, 1990, pp. 231-241

(18)松本拓磨「贈り物の包装から見る、心の空間について」, 京都大学大学院教育学研究科紀要 57, 2011,

pp. 323-335
(19) 吉村暁子「明治期の作法書史における『智恵袋』『心頭語』と『處世交際法』位置づけの試み」, 立教大学ランゲージセンター紀要 (35), 2016, pp. 73-80
(20) 吉川さとみ・歌川光一「戦前期の礼儀作法書における音楽関連の記述およびその変容:書誌情報を通じた傾向の把握を中心に」, 東京藝術大学音楽学部紀要 40, 2014, pp. 31-49
(21) 呑海沙織・綿抜豊昭「近代における図書館に関するマナーの受容：礼法教育からのアプローチ」, 日本図書館情報学会誌 Vol. 58, No. 2, 2012, pp. 69-82
(22) 玉井朋「三宅花圃「萩桔梗」における礼儀作法と婦徳の涵養--良妻賢母教育の成果」, 藝文攷(15), 2010, pp. 81-94
(23) 文沢義永・吉田正昭「現代日本人の礼儀意識の構造」, 心理学研究, Vol. 41, No. 2, 1970, pp. 49-66
(24) 野村雅一「西洋的礼儀作法への記号論的アプローチ--作法書を手掛りとして」, 人文学報(38), 1974, pp. 1-17
(25) 佐々木眞由美「現代青年のマナー観について ： 礼儀作法の形成過程」, 北海学園大学大学院経営学研究科　研究論集 (10), 2012, pp. 25-37
(26) 小森政嗣「「礼儀正しさ」の非言語的表出方略」, 電子情報通信学会技術研究報告. HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 104(745), 2005, pp. 35-38
(27) 石田かおり「日本における身体技法の近代化の問題点と解決策」, 駒沢女子大学研究紀要 11, 2004, pp. 7-16
(28) 野村竜也・中村歌織「ロボットの発話様式と姿勢の矛盾が人の記憶想起および印象に与える影響」, 認知科学 Vol. 18, No. 3, 2011, pp. 462-469
(29) 兪彭年「中国人から見た日本人の言語表現心理」, 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要, 2001, pp. 165-172
(30) 矢野智司・越智康詞・松田恵示「マナーに関する教育学的研究」, 日本教育学会大會研究発表要項 62 号, 2003, p. 38
(31) 斎藤光「『男女の交際と礼儀』の基礎研究」, 京都精華大学紀要第 33 号, 2007, pp. 221-238
(32) 小林善帆 a「植民地朝鮮の女学校・高等女学校といけ花・茶の湯・礼儀作法 ： 植民地台湾との相互参照を加えて」, 日本研究 47, 2013, pp. 207-237
(33) 小林善帆 b「植民地台湾の高等女学校と礼儀作法空間」, 民族芸術 25, 2009, pp. 91-97
(34) 渋谷恵 a.「タイにおける国民的礼儀作法の成立と普及 ： 人民党政権下における文教政策を中心に」, 筑波大学教育学系論集 25(2), 2001, pp23-34
(35) 渋谷恵 b.「タイの初等教育における礼儀作法の教育―1990 年改訂カリキュラム・教科書の分析を中心に―」, 比較・国際教育(7), 1999, pp. 21-34
(36) 韓在熙「韓国の伝統文化教育に関する研究 ： 幼児保育カリキュラム事例を中心に」, 日本教育学会大會研究発表要項 66, 2007, pp. 86-87
(37) 近藤英男・山上仁士「スポーツマンシップについての研究」, 体育学研究 10(1), 1965, p. 226
(38) 上野孫吉・井上公一・氏家道男・矢野博志・小山泰文・小川英雄・今藤邦宏・中野雅之・富木謙治「武道と礼―武道は礼にはじまり礼に終わるの考察―」, 武道学研究 10(2), 1977, pp. 74-76
(39) 村山輝志「武道と礼について」, 武道学研究 39, 2006, pp. 32-32
(40) 藪崎聡「現代の武道における礼儀と自己形成」, 武道学研究 23(2), 1990, pp. 63-64
(41) ビットマン ハイコ「日本武道に見られる思想の研究（その４）：日本武道における「礼」の一考察」, 金沢大学留学生センター紀要 9 号, 2006, pp. 43-48
(42) 馬場欽司「剣道に於ける礼法についての一考察」. 武道学研究 Vol. 5 , No. 1, 1972. p. 20
(43) 尾形敬史・風間美佳「少年柔道の指導に関する一考察」, 茨城大学教育実践研究(24) , 2005, pp. 179-192

(44)佐藤博信「柔道の「礼法」における一考察」, スポーツ科学・健康科学研究 11, 2008, pp. 19-24
(45)岸本裕行「米国における空手道の実態調査」, 武道学研究 17(1), 1985, pp. 71-72
(46)亀井静香「学校教育における武道場の研究 ― 武道必修化にともなう整備促進への基盤として ―」, 法政大学大学院紀要　デザイン工学研究科編 2, 2013, pp. 1-4
(47)儀賀美智子「日本と諸外国とのマナーの比較 ： 文化のギャップがビジネスに及ぼす影響」, 鈴鹿国際大学紀要 Campana 14, 2007, pp. 73-86
(48)金田桜子・大西紀夫「企業におけるビジネスマナーの意識調査」, 富山短期大学紀要 39, 2004, pp. 7-16
(49)平田祐子「現代社会におけるマナーの捉え方 -秘書検定の座視するものから-」, 高田短期大学紀要 29, 2011, pp. 39-49
(50)島田洋子「『伝書』にみる礼儀の心と形を「秘書実務」教育に生かすための実践的研究」, 長野女子短期大学研究紀要 (6), 1998, pp. 30-41
(51)森直一・笠木茂伸・高山茂夫・田川明子・伊瀬寿子・関武矩「病院職員の身だしなみと礼儀」, 第 18 回日本病院学会臨時増刊号専門集会の部, 1968, pp. 64-66
(52)高綱睦美「大学におけるキャリア教育の目標と課題 ： キャリア発達の視点から(地域発信の企業経営と経営教育)」, 日本経営教育学会全国研究大会研究報告集(56), 日本マネジメント学会, 2007, pp. 71-74
(53)森川佳世「女子短期大学における社会参画型教育プログラムに関する考察 ： 実践的なビジネスマナー教育の一例」, 埼玉女子短期大学研究紀要 (25), 埼玉女子短期大学, 2012, pp. 235-250
(54)前掲書(48)
(55)江口敦子・住田昌二「礼法教育の研究(第 1 報) ： 小学校における礼法の成立過程」, 日本家庭科教育学会誌 26(2) , 1983, pp. 13-17
(56)江口敦子・住田昌二「礼法教育の研究(第 2 報)：小学校用礼法教科書の内容の推移」, 日本家庭科教育学会誌 26(2), 1983, pp. 18-22
(57)手治雅之・西木成男「ビジネス知識とマナーの指導内容と実践」, 研究紀要 33 号, 筑波大学, 1996, pp. 59-64
(58)江本理恵、横山節雄、宮寺庸造「情報教育における授業・教材デザインの体系化について」, 電子情報通信学会技術研究報告, 教育工学 98(496), 一般社団法人電子情報通信学会, 1998, pp. 179-186
(59)陶智子・綿抜豊昭 (編著)『近代日本礼儀作法書誌事典』, 柏書房, 2006, p. 614, p. 622
(60)山﨑貴子「近代日本における『たしなみ』への関心の高まりとその変容：礼儀作法書刊行動向の分析から」京都大学 教育・社会・文化：研究紀要, 2009, pp. 21-40
(61)井上快・鈴木理恵「明治 20 年代初頭の修身科における作法の指導」『教育学研究紀要』中国四国教育学会第 63 巻, 2017, pp. 145-150
(62)片山清一「明治前期の小学校修身書にみる女子道徳の変遷」『近代日本の女子教育』, 建帛社, 1984, p. 26
(63)田部井恵美子「家庭科教育と修身科「作法」との関連について--中等教育における教科書を中心として」, 東京学芸大学紀要 第 6 部門 産業技術・家政 (34), 1982, pp. 197-206
(64)野村満里子「学校における礼法教育について--アンケートによる現状調査より」, 日本私学教育研究所紀要 30(1), 1995, p. 211-232
(65)野村満里子「学校における礼法教育について(2)アンケートによる生徒の意識調査の結果より」, 日本私学教育研究所紀要 31(1), 1996pp. 133-154
(66)篠原久枝「宮崎県内の小学校・中学校における食育の実態調査：五感を生かした味覚教育を中心に」, 宮崎大学教育文化学部紀要. 芸術・保健体育・家政・技術 27 号, 2012, pp. 1-15
(67)柴崎直人「小学校低学年向け道徳副読本における『礼儀』の内容について」, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第 12 号, 2011, pp. 51-58

(68) 柴崎直人「小学校中学年向け道徳副読本における『礼儀』の内容について」, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要第 13 号, pp. 49-58
(69) 柴崎直人「小学校道徳副読本における『礼儀』の扱われ方」, 日本道徳教育学会紀要, 道徳と教育, №330 , pp. 21-31
(70) 松田純子「幼児の生活をつくる-幼児期の「しつけ」と保育者の役割-」, 栄養教諭(9), 日本文教出版, 2007, pp. 78-81
(71) 増田翼「しつけ研究の系譜と課題」, 仁愛女子短期大学研究紀要 (46), 2014, pp. 73-82
(72) 吉川昌子「発達課題にもとづいた“しつけ”の一考察」, 中村学園大学・中村学園大学垣期大学部研究紀要 第 36 号, 2004, pp. 103-108
(73) 下村道子「食事における礼儀作法--食事のマナーと子どもの躾」, 栄養教諭(9), 日本文教出版, 2007, pp. 78-81